# 雲晴

秋彼岸号

「雲晴」第二十八号
平成三十年九月一日発行

貞林院瑞正寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五－四六－五
電話（〇三）三六二七－三四一一
FAX（〇三）五六九九－五九一五

おしえの花束

## 真のよりどころとなる信仰

日本に長く住んでいたドイツ人が、母国へ帰って友人にこんなことを話したそうです。

「私は長く日本に住んでいて、どうしても理解できなかったことがあります。それは、宗教のことです。日本人はお正月になると神社へお参りします。お寺にも行きます。お葬式は多くの人が仏教で行います。ところが、結婚式はキリスト教でやる人がたくさんいます。なぜ一人の人が異なった宗教を持つことができるのでしょうか。ほんとうによりどころとなる信仰を持っているのでしょうか。とうとうわからずに帰ってきてしまいましたよ」

私たち日本人は、知らず知らず神社へ行ったりしていますが、いわれてみれば、このドイツ人のいう通りですね。

実は真によりどころとなる宗教を持っているかという問いは、大変重要な問いかけなのです。ちなみに、あなたは自分の宗教は何々であるとはっきり答えられますか。多くの日本人は「無宗教です」と答えるそうです。これでは困ります。

私たち人間がこの世に生を受けて、人間らしく生き抜き死んでいくためには、その人の人生行路をつねに指し示す羅針盤が必要です。つまり〝どう生きるか〟ということです。このことが一番はっきりするのは、大きな悩みや逆運、そして死に直面したときです。お釈迦さまは、真のよりどころとなる信仰を持ちなさいと次のように教えてくださいました。

**おのれこそ　おのれのよるべ**
**おのれを措きて　誰によるべぞ**
**よくととのえし　おのれにこそ**
**まことえがたき　よるべぞを得ん**

〝よくととのえし〟とは、真のよりどころとなる信仰を持つあなたのことです。

お釈迦様は娑婆往来八千遍されてご修行を積まれたそうで、それを分かりやすく説いたものが「釈迦本生譚」、つまり「ジャータカ物語」です。その中に「鸚鵡」の話があります。

## ●山の鸚鵡●

勝専寺住職

昔、ヒマラヤ山の中腹に大きな太い竹が沢山茂った森があり、多くの動物たちが楽しく暮らしておりました。ある風の強い日、擦れ合った竹の摩擦で山火事が起こり、広がる火に鳥も獣も逃げ惑うばかりでした。が、一羽の小さな鸚鵡が麓の池に向かって飛び立ち、池の水に体を浸すと、山の中腹まで飛び帰り、燃え盛る火に向かって羽を振って雫をたらす。それを何十回、何百回と繰り返しておりました。疲れ果てて息も切れ…。この様子をじっとご覧になっていた仏様が鸚鵡に優しく問いかけられました。「お前が苦労して運んでいる水では、とてもこの火は消せないのではないかね」と。すると鸚鵡が「消えるかどうかは判りません。ですが森の仲間を助ける為に、私にできることはこれしかないのです」と言うや、また麓の池に飛んで行きました。仏様は大きく頷かれ、不思議な力を示されたのです。黒い雲が大空一面を覆い、大粒の雨が降り始め、さしもの大火も消え失せました。この鸚鵡こそがお釈迦様の前世でのお姿でした…。小さな事でも良い。わたくしも仏教会さんがた会の一隅で小さな鸚鵡になれたらと思うことです。

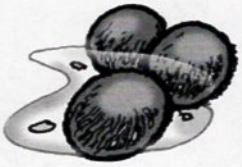
# 民話の小箱（北海道）

## 島になったおばあさん

●愛まご

孫の帰りを待つため島になることを望んだ可哀想なお婆さんのお話

昔、アイヌの民はコタンと呼ばれる集落を作り、森で獲物を取って暮らしておりました。ところがある時を境に森で獲物が極端に取れなくなり、別のコタンと獲物をめぐって争いがしばしば起こるようになりました。



コタンの酋長のエカシは思い余って相手のコタンの酋長に話し合いを持ちかけようとしましたが、その矢先に相手のコタンが強襲してきてしまいました。エカシは大怪我をしてしまい、おばばに自分の幼い息子、トンクルを託しておばば達にこのコタンから逃げるように言いました。

燃えるコタンを後にしておばばは必死になって孫を守ろうと走りましたが、父が殺されたことを知ったトンクルは「仇をとる」と言って、元いたコタンの方へ走っていってしまいました。おばばは心労のあまり倒れふし、気がついた頃には夜になっていました。

疲れた体を引きずって、やっとの思いで元のコタンにたどり着きましたが、既にそこには誰もおらず、トンクルの姿はどこにもありませんでした。変わり果てたコタンに座り込むおばばには、もう泣く力も残ってはいませんでした。

翌朝、おばばは声も限りにトンクルの名を叫び探し続け、摩周湖のほ

# 一口法話

## 時の流れ

暑い夏が終わり、美しい月夜、虫の声、大自然のあらゆるものがゆったりと流れ、秋の季節となりました。

静かに自分自身を見つめることができる秋こそ、私たち人間は自分の力だけで生きているのではなく、あらゆる命を育む恵みをいただき、阿弥陀仏の無量寿、無量光により、生かされているという事実に目覚める時です。

法然上人は〝月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人の心にぞすむ〟と歌っていらっしゃいます。月の光があらゆるものを照らしているように、私たちが阿弥陀仏の無量寿、無量光によって生かされていることに気づこうと、気づかなかろうと阿弥陀様の慈悲の

とりへやってきました。すると山の神カムイヌプリが現れて、なぜそのように嘆いているのかを尋ねました。おばばは事の一部始終を話し、「山の神様、私を島にしてください。そしてどうかこの湖にいつまでも置いてください。私はここでトンクルが帰ってくるのを待ちたいのです」

カムイヌプリはそんなおばばの心に打たれ、おばばを摩周湖の島にしてあげました。それからというもの、おばばは摩周湖に人がくるとトンクルが帰ってきたと思って泣くので、どんな晴れた日でも必ず雨が降り、雪がふるのだそうです。

おしまい

光はいつも私たちに向かって差しのべられているのです。

空気も水も大地も太陽も、どれも私たちにとってかけがえのないものです。そのどれも人間が作り出すことができないものなのに、いつもあるのが当たり前のように思っているのは、人間の思い上がりではないでしょうか。

時は流れ、姿を変え、私たちの人生も流れを変化していきます。小さくて愚かな人間の私たちがあらゆる大地の恵みをいただいて生かさせていただいていることは誠に有難いことなのです。

総本山知恩院布教師会ホームページより

## 書への誘い

「柔和な心ほほえみの顔」

故林 錦洞 書

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

浄土宗の根本経典である浄土三部経の一つ「無量寿経」は、法蔵菩薩さまが四十八の願いを立て数々の修行の末に阿弥陀如来になられるというものです。法蔵菩薩さまが菩薩行を積まれ、無上正覚を成就された後に「和顔愛語」にして意を先にして承問す」と説かれております。即ち「相手の身になって和やかで穏やかな笑顔と慈悲に満ちたあたたかい言葉でもって、相手の気持ちを慮って先んじて動く」という意味です。この「和顔愛語」とは布施行の一つとしてもよく使われる言葉です。

まもなく秋のお彼岸を迎えますが、お彼岸中に励むべき仏道として「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智恵」というものがあります。最初にある布施行とは金銭や物を施すことだけが布施ではありません。体の不自由な人に手を差し伸べる、席を譲る、悩み苦しんでいる人に優しく微笑む、あたたかい言葉をかけるなど、これらも立派な布施行です。これならば財が有る無しに関わらず誰にでも実践できる布施行ではないでしょうか。

近頃は人との関わりが希薄となり、自分さえ良ければという風潮も感じられる世の中になってしまいました。そんな時代だからこそ今一度法蔵菩薩さまがお誓い下さったみ心をかみしめて、私たちも「柔和な心ほほえみの顔」を忘れないようにしたいものです。

# 秋の彼岸法要ご案内

秋の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

**九月二十三日(日) 正午より**

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

塔婆料　三千円
回向料（お布施）志納

## ◎先代内室故林暎子 一周忌法要を厳修◎

去る七月二十九日当山本堂にて先代内室故林暎子の一周忌法要が厳修されました。

命日は八月十七日ですが旧盆とも重なるため早めにしたものです。

この度の一周忌の法要は、葛飾部内ご寺院の寺庭婦人（お寺の奥様方）を中心にご参列いただきました。同じ年代の寺庭として生前お付き合い下さった方々はさすがに少なくなりましたが、故人を偲んでいただけたらと思いお声をかけたものです。

御導師には法類（寺としての親類）で検見川の善勝寺御住職であります日比野匡道上人にお勤めいただきました。法要の後のご挨拶では当山との関係なども丁寧にご説明いただき、最後に一緒にお十念をお称えしていただきました。

母は生前大変に花が好きでしたので、お蔭さまで沢山のご供花により本堂には花一杯の法要となりましたこと有難く思います。

月日は本当に早いもので、母がお浄土に旅立ってからもう一年が過ぎてしまいました。今年の夏は連日のように猛暑が続きましたが、思い起こすと母の通夜・葬儀も三十六度という大変な暑さでした。

そんな中檀信徒をはじめ大勢の方々にお参りいただきましたことにあらためて感謝する次第です。

「花に囲まれた本堂で　御導師よりご法話を頂く」

お寺の裏にある水元公園の池では、七月中旬から八月にかけて蓮の花が満開です。一蓮托生（いちれんたくしょう）、母もお浄土に咲く蓮の上で先代と再会し、きっと仲良くやっていることと思います。合掌

## ◇これも仏教用語なの？◇

### 「億劫（おっくう）」

「人と話すのも億劫だ」と使われるこの言葉も仏教用語です。億劫の「劫」は古代インドでは最長の時間の単位で、「一劫」は百年に一度天女が大きな岩山に降りてきて羽衣で山を撫でて、その摩擦で岩山が無くなるまでの時間、つまり限りなく無限に近い時間を表しています。その「劫」の一億倍が億劫ですから考えられない程長い時間という意味です。そこから計り知れない時間がかかることは容易ではなく面倒に感じることから「面倒臭い」の意味として使われるようになりました。

（貞林院瑞正寺）

「お墓にて回向　前列左より日比野上人・岩田上人・副住職　後列左より住職　兄英道上人」